



もりうちよしひさ
森口美文さん
(昭和34年生まれ・56歳)



ふけあゆみ
福家安祐美さん
(香川県立丸亀高等学校2年生)

コーディネーターより

今回取材をさせていただいた森口美文さんは、高松市国分寺町の國分八幡宮の宮司さんです。國分八幡宮をはじめ、神谷神社、城山神社、春日神社、楠尾神社の5つの神社では、祭りのときに神楽を奉納する「神楽組」というものがあり、森口さんも5歳の頃から神楽に携わってきました。実はインタビューを担当した福家さんのお父様はそのうちの1つ、城山神社の宮司さん。子供の頃から神楽に親しんできた2人にとって、神楽は人が自然とどのように関わってきたかを紐解く入り口になったようです。森口さんは、神楽組の中では最年長者。時代とともに変わりゆく祭りの形を受け入れながらも、神楽に伝わる自然への感謝の心を残そうと、日々尽力されています。

した。他にも、「御日待神事」といって、お日様が姿を表すのを待って夜通し行うものもあつたり、自然への畏敬の気持ちが色濃く反映されています。

— 神楽組で一番大変なことは？
やっぱり、担い手が減っているのが一番の問題点かな。祭りに奉仕する人っていうのは、昔から氏子さんや自治会などその地域に暮らす人が中心になんてすね。でも今は高齢化していますし、最近ではマンション暮らしが増えて地域に関わる人も減っていますから。

— 昔ながらの祭りを守っていくのが、難しくなってきたというところですか？
昔の神楽は夜の8時にはじまって、終わりは夜中の0時を過ぎよつたからね。祭りは地元の人たちの娯楽の一つでもあつたから、皆が寄り集まって、お酒やおいしいものを食べながら過ごすんです。今みたいに終わる時間を決めて予定通りに進めるんじゃなくて、もつとゆっくりに進める流れの中で神事が行われていたんですね。

— 祭りを続けるには、時代に応じて変えるべきところもありますが、変えてはいけないものもあると思うんです。それはやっぱり、誰のためにやるのか、ということ。祭りは神様に見ていただくためのものから、神楽を舞うときも、それはいつも意識していますよ。例えば、お面一つとっても、もとは生木、生きている木を伐ってつくったものです。生きたものには魂が宿ります。奉納するサカキ

神楽で伝える
自然への感謝の心

里神楽を舞い伝える人 森口美文さん(高松市)



1 國分八幡宮の「桜まつり神楽祭」の様子 2 お話を伺った森口さん。貴重な資料を見ながら、里神楽の世界を紐解いてくれました 3 お話を伺った森口さんが所属する「阿野北条神楽組」の奉納神楽。現在は5人の宮司と神社関係者を合わせて12~13人で活動しています(写真は城山神社で行われた神楽の様子)

伝統は、形を変えてでも残していくもの。
伝承は、形を変えずに残していくもの。



森口さんから受け取った言葉

— 神楽はいつ頃からあるんですか？
「里神楽」とは、宮中で行われる御神楽に対して、里の人たちが舞うものを言います。五穀豊穡や無病息災を願って神様に奉納するもの。香川県の場合は、書物が残っていないのはっきりとした時期はわかりませんが、江戸時代前半頃にはじまったと言われています。

— 神社の宮司さんたちが舞うというのは珍しいですね。
神職による神楽組は香川県でも数少ないんですよ。この辺りにはかつて国府があつた場所なので、その関係で土地の神社を司る人たちが担い手になったようです。

— 一番大きな奉納は秋祭りですが、春にも「桜まつり神楽祭」というのがあります。古くから桜が散る頃に疫病などが流行つたので、無病息災を祈って舞われますね。
そうやって自然への感謝を捧げて、神様をもてなし楽しんでいただくのが神楽の意味。そのそばで私たちが一緒に楽しませていただく。神様と一体になるということが祭りの本質だと思うんです。神楽で舞われる演目も、古事記の逸話などを題材に、人が自然とどう関わって生きてきたかを教えてくれる内容が多いんですよ。

よく皆さん、伝統ということを言いますが、伝統というのは形を変えてでも残していくものなんです。でも伝承は、形を変えずに残していかなければならない。里神楽を通して残したいのは、まさにこの祭りの本質の部分ですね。

参加者の感想



限られた時間の中で人が集まり、同じ時間を一緒に楽しむ。それが「祭り」。幼い頃から神楽の雰囲気を感じてきた私ですが、お祭りの時期になるとワクワクします。最初、神楽と里海がどうつながるのかわかりませんでした。森口さんの話を聞き、神楽は神様に五穀豊穡を祈り、感謝すること。つまり神楽に人が集まるということだとわかりました。神楽は里海と人々をつなぐ、一つの方法ではないかと思えます。

